

た昔ながらの女工員の手による織物工場の労働環境の劣悪さは、いまだに私の目に焼きついている。薄暗い小さな工場の中に鳴り響く機械の轟音に私は耐えられず表へ出てしまった。実地調査において体で感じた問題意識を明確にして掘り下げている。

くことができれば、巡検の意義も見えてくるのではないだろうか。またそれによってこれから地理学を専攻していく為の気構えが固められればと思う。

(9月7日 内藤教官指導)

木更津・館山巡検

蓮尾 順子

10月1日、2日と式先生指導の下、2年生4回日の巡検が木更津・館山で行なわれた。10月1日木更津に到着した私達は、房総の地形の見所として、砂洲の列・穿入蛇行・成田層の台地・湾奥砂洲の説明を受けたあと、県立上総博物館を訪れ、房総の歴史・文化の概要をつかんだ。房総は、古代から三浦半島(鎌倉)との結び付きが強く、また開発も早かったという。博物館内では、開発に関連して幾つかの水利技術(上総掘り・横井戸マンボウ・川廻し)に触れることができた。昼食後今度は木更津駅から南東方向に進んだ林道付近で露頭を観察する。かつて矢那川に刻まれた河床が地盤隆起によって陸地に現れて形成されたという段丘が、黄色を呈する東京パミス層、一列に規則正しく並んだ段丘礫、あるいは地質の違いを手掛かりとして、露頭の中に、はっきりと見て取られた。

翌10月2日は拠点を館山に移した。前日とは違ってかわったような雨空の下、朝食後の散歩も兼ねてまず沼のサンゴ層の観察に出かける。開析した谷が縄文海進で溺れ谷を形成し、水が引いたのちも埋積低地としてその名残りをとどめる中に、サンゴのかけらが点在する。縄文海進は5m程度であったにも関わらず、海拔15m付近でも露頭観察が可能なのは、その後の房総半島の隆起による

のだそうだ。一旦、館山寮に戻ったのち今度はバスで洲崎をまわり平砂浦に到着。sand スキー場を見学。これは、浜堤の砂が冬の西風によって第3系丘陵地(三浦層群)に吹き上げられたために内陸に形成されたものである。再びバスに乗って、相浜・布良の2つの漁業協同組合を訪れる。他の例にもれず、ここでも兼業化・高齢化が進行しており、そのため高級魚志向が強いということであった。昼食後、徒歩で安房神社へ。房総文化発祥の地とされる神社内には、縄文海進時に形成された海食洞と思われる先住民の洞穴があり、内部では人骨・土器・貝塚が発見されている。

バスで野島崎にまわり、海岸沿いを散策する。関東地震の際形成された隆起波食台を観察するが、やや沖の方へ傾いている。この頃、雨が本降りとなったため、長尾川の穿入蛇行観察は断念し、一同、予定より早い帰路につくこととなった。

今回の巡検では房総半島の地形の随所に地盤隆起の痕跡が見られたことが強く印象に残っている。この隆起が将来も同じスケールで続いた場合、房総半島の地形はどのような変形をうけることになるのだろうか。不安定な地塊の上で生活を営んでいる人間の小ささ、危なっかしさというようなものを痛感せずにはいられなかった。

(10月1日～2日 式教官指導)